

熊本市における戦災の状況

1.空襲等の概況

熊本市は九州の中央に位置し、国防上の要地として明治4年(1871年)に鎮西鎮台(後の第六師団)が置かれた。熊本城本丸を中心に司令部や兵営、病院、倉庫群、兵器・弾薬の貯蔵施設などが設けられ、市街には軍関係の食糧や日用品、酒保品を納める中小企業も多く、繁栄を極めていた。熊本城は熊本市の中心であり、そこを軍が大きく支配していた。これが戦前の軍都熊本の姿であった。

昭和20年(1945年)当時は、日本全土で2月本土決戦態勢が本格化し、内地決戦に向けて軍制の改革が行われた。熊

本城本丸にあった留守第六師団司令部は熊本師管区司令部に変わり、管内各部隊の名称も歩兵第一補充隊は西部第61部隊、騎兵補充隊は廃止され同部隊に吸収、歩兵第二補充隊は西部第60部隊、歩兵第三補充隊は西部第18部隊、砲兵補充隊は西部第21部隊、工兵補充隊は西部第65部隊、輜重(しちょう)補充隊は西部第67部隊、通信補充隊は西部第26部隊、第6師団制毒訓練所は西部第25部隊へと変更され、任務も従来の兵員訓練の他、作戦配置部隊のない地区の警備を担当することになった。

池田町には陸軍航空本部、健軍・帯山町には昭和19年(1944年)に健軍三菱航空機工場が建設され航空部隊が展開していた。また、師管区高射砲部隊が新設され熊本駅や健軍飛行場等に配備された。

終戦時には市街の30%が被災していた。空襲の後は「敵がすでに鹿児島に上陸した」「今後は戦爆連合1000機で何日に熊本を大空襲する」等各種のデマが流れた。また、赤痢が蔓延し、戦災復興の陣頭指揮を執っていた平野龍起熊本市長も8月10日赤痢で死亡した。

2.空襲の状況

【7・1空襲】

昭和20年(1945年)7月1日、アメリカ第73爆撃航空団所属のB29爆撃機154機が、16時5分から17時17分にかけてサイパン基地を飛び立った。牛深付近に攻撃侵入点をおき、宇土半島の海岸線に沿って熊本市に侵入。熊本軍用地帯、熊本駅および操車場、製紙工場、郡是製糸工場、鐘淵紡績工場、三菱航空機株式会社熊本工場、西部ガス株式会社を目標に23時50分より、2日1時30分ころまで熊本市に焼夷攻撃がかけられ、投下量は1107.2トンに達した。(『第21爆撃飛行集団戦闘要報』)

新市街、下通町、水道町、大江町、新屋敷町、安巳橋通町、水前寺町、草葉町、黒髪町など市街の大部分が焼失し、熊本市の損害は市街地の約20%に及んだ。被害状況は、被害戸数9077戸、罹災人員36314人、死者388人、重軽傷者475

人、行方不明13人、家屋破壊・焼失9077戸であった。(『熊本市空襲被害状況』)

被災した主な機関は、熊本幼稚園、白川・黒髪・本荘・壺川・熊本高等小学校、熊本中学校、済々黌、大江高等女学校、熊本医大などの教育施設が全焼又は一部焼失、熊本県庁(2日熊本市公会堂へ移転)、県会議事堂、県立図書館、市電気局、専売局工場、熊本郵便局など焼失、熊本市電は全線不通(12日一部開通)、電話線全面不通(11日620本開通)、電気も配電を中止した。市の大半は廃墟と化し、出水町の肥後製ろう株式会社は5日間燃えるにまかされた。死傷者の収容は警察、警防団総動員で数日を要している。(『熊本の昭和史』)

【8・10空襲】

8月10日午前、沖縄基地を発進し、東方から侵入したB29と小型機の編隊約210

機が県下一円を襲撃した。熊本市に対しても白川以東から以南にかけて焼夷攻撃と機銃掃射を加え、7月1日の空襲で焼け残っていた、本山町、春竹町、本荘町、大江町などを焼くとともに、熊本市立高等女学校などが焼失した。熊本市の被害戸数は1551戸、内家屋全焼1491戸、半焼58戸、半壊2戸、罹災人員6308人、死者45人、負傷者43人にのぼった。

熊本のほか、宇土、水俣、隈庄などでも被害が大きかった。鹿児島本線緑川鉄橋橋脚が爆破され不通となり、宇土町では中心部を大半焼失したほか、宇土保健所・宇土駅・宇土国民学校・宇土高等女学校なども焼失し、日本合成は操業不能に陥った。隈庄町周辺では隈庄・豊田・杉上・東部国民学校が焼失。水俣町は中心部が焼失、日窒水俣工場は操業不能に陥った。(『熊本の昭和史』)被災状況(『熊本市戦災復興誌』)

熊本市関係空襲年表(『記録熊本空襲』『健軍三菱物語』『熊本昭和史年表』)

昭和19年(1944年)11月21日	在中国米軍機B29、80機九州西部に午前来襲。熊本市花園町柿原に500キロ爆弾10数発投下される。
昭和20年(1945年)3月18日	米艦載機県内各地空襲。三菱航空機被災(死者6名、負傷者13名)
3月19日	米艦載機1400機九州に来襲。
3月27日	熊本市健軍町の三菱重工業熊本航空機製作所が爆撃、機銃掃射を受ける。(死者1名)
3月28日	艦載機1300機九州へ
4月7日	戦爆連合九州へ
4月17日	B29県下へ約70機来襲
4月21日	小型規約280機、九州南部飛行場へ
5月13・14日	県下空襲、三菱航空機(死者8人、負傷者3人) 傷痍軍人療養施設再春荘、恵楓園、熊本工業学校が爆撃される。
5月24日	午後、艦載機200機九州へ
5月25日	午後、艦載機九州へ
6月2日	艦載機(グラマン等小型機)260機県下各地へ
6月3日	艦載機170余機九州へ
6月12日	グラマンなど小型機40機、県下各地へ
6月17日	B29県下工場地帯を夜間焼夷攻撃
6月29日	早朝、B29約30機、県下各地を焼夷弾により空襲
7月1日	B29、154機が、翌2日未明にかけて熊本市を空襲、新市街・下通町・大江町・水道町など市内の大部分焼失、各種デマ流布。
7月3日	小型機約100機、九州各地飛行場へ
7月4日	B29戦爆連合九州へ、熊本郵便局焼失
7月5日	熊本市花岡山の蓬莱閣に第30戦闘飛行集団司令部が進出
7月6日	戦爆連合約160機九州へ
7月10日	小型機の戦爆連合約140機、熊本市及び県東北部へ
7月11日	戦爆連合約200機九州へ
7月14日	戦爆連合150機、県下各地を空襲
7月15日	B29、小型機107機の戦爆連合県下へ
7月16日	B24、30機、B25・P38・P47・P51など90機県下各地へ来襲、午後、小型機130機天草方面へ来襲
7月17日	B29、10機、小型機約50機県下各地へ
7月24日	P51など小型機約1500機県下各地へ、熊本駅も機銃掃射
7月25日	小型機多数各地へ
7月27日	小型機多数各地へ
7月29日	戦爆連合約500機来襲
7月30日	小型機約400機来襲
7月31日	戦爆連合約400機来襲
8月1日	戦爆連合140機九州各地へ
8月5日	戦爆連合380機航空基地周辺へ
8月7日	戦爆連合250機、日窒・熊本市など各地
8月8日	小型機来襲
8月9日	小型機約300機来襲
8月10日	県下各地に早朝より戦爆連合約210機来襲、各地の被害甚大、熊本市立高等女学校など焼失

機銃掃射(清水町男性、当時国民学校三年生の体験より)

昼夜を問わず、空襲が始まった。学校に着いたかとおもうと空襲警報のサイレンが鳴る。校庭に全校生徒が集合し、各町内毎に整列し、上級生の先導で家路を急ぐ。帰りつかないうちに、早くもゴウツという爆音が遠くの方から次第に近づいてくる。

数機、時には数十機のグラマン戦闘機が上空に姿を見せたかと思うと、キューという一種独特のプロペラ音が聞こえる。誰ともなく「待避」と叫ぶ。皆一斉に畑の中や、道端に腹ばいになって身を隠す。バリバリと、機銃の音をさせながら超低空で飛び去っ

ていく。おそろおそろ見上げると、飛行機を操縦している外人の顔が見える時さえあった。

総務省一般戦災ホームページより



熊本大空襲を記する碑
http://www.geocities.jp/torikai_007/war/1944/b_29.html

画像提供 / 熊本市在市ライオンズクラブ(熊本大空襲慰霊碑)